

●グローバル化時代の医療・検査事情 31

世界の医学部を巡って (8)
I ヨーロッパ編 アイルランド

な ら のぶ お
奈 良 信 雄
Nobuo NARA

2007～08年に文科省の委託事業として海外の医学教育調査を担当した際、アメリカやイギリスのように広く知られている国に限らず、できるだけ多くの国を訪問して医療教育システムを比較研究することにした。

しかし、ある程度は海外とも交流が築けている現在とは違い、当時は海外の医学教育専門家にはほとんど知人がいなかった。そこで、大使館に依頼し、当該国の医学部を紹介してもらうことにした。つまり、外交のプロに頼ったわけだ。

大使館への連絡は、文科省から外務省経由で行われた。日本から各国大使館への連絡は、機密性を考慮し、メールではなく、“電報”が基本だった。電報だと長々と説明できず、いきおい「〇〇ダイガクヲホウモンシタイノデ、ベンギヲキョウヨサレタシ」程度の必要最小限の内容にならざるをえない。しかし、現地医学部への連絡は隔靴搔痒の感で、かえって時間もかかってしまった。

因みに、「便宜供与」は、当時、元防衛省次官が納入業者に便宜供与したとして報道されており、てっきり不適切な関係と思い込んでいたが、実際にはレッキとした行政用語だった。

事業は正式に認可が降りた10月以降に開始された。寒さを避けるべくマレーシア、オーストラリアの大使館に連絡し、2008年1～2月に両国を訪問した。これらはいずれ紹介するとして、マレーシアのペナン大学の学長はアイルランドから派遣されていた。

ペナン大学は小規模の大学で、基礎医学を教育できる教員も設備もない。このため、学生は全員アイ

ルランドに送り込まれ、基礎医学を履修してからペナンに戻り、ペナンで臨床医学教育を学んでくるシステムになっていた。他に類を見ないシステムに興味を覚え、ペナン大学学長に掛け合ってもらい、アイルランドの医学部を視察調査する途が開けた。

以来、海外医学部の視察は、伝手を利用して、“電報”はやめてメールで直談判することになった。

アイルランドは面積が約7万300平方キロメートルで、北海道の8割ほど¹⁾。首都はダブリンで、人口はおよそ492万人、うち約78%はカトリック教徒である。公用語はアイルランド語(ゲール語)と英語である。

歴史的には12世紀から大英帝国の植民地支配を受けた。1919～1921年に英国からの独立戦争を経て、1922年に英連邦内の自治領として「アイルランド自由国」となり、1949年に共和制のアイルランドが誕生した。1973年にはヨーロッパ経済共同体EEC(後のEU)に加盟し、現在に至る。

EEC加盟後、アイルランドは急速な経済成長を遂げ、1995年から2007年までの間は「ケルトの虎」時代として知られるほどに繁栄した。もっとも、2008年のリーマンショックの煽りで経済危機に見舞われた。

アイルランドでは、国立のダブリン大学医学部(University College Dublin School of Medicine: UCD)と、私立のアイルランド王立外科大学医学部(Royal College of Surgeons in Ireland School of Medicine: RCSI)を訪問した。訪問したときは経済的に豊かな時期で、教育を国家産業と位置づけて、レベルの高い医学教育が行われていた。

I. アイルランドの医療制度

アイルランドの医師数は16,316名(2019年)、うち女性医師が7,372名である²⁾。人口1,000人当たりの医師数は約3.34名で、日本の2.49名に比べて恵まれている。病院数は86で、病床数は14,475である。アイルランドの医療には、公的医療と民間医療サービスがある³⁾。

公的医療は、Health Service Executive (HSE) が運営する医療サービスで、public health service と呼ばれる。小児に対する予防接種、定期検診、妊娠期間中並び産後6週間の女性に対するケアが無料で提供される。

体調に不良を感じた場合、まずホームドクター (General Practitioner (GP)) を受診し、専門治療が必要と判断されればGPから紹介される。入院医療には一定額の負担が必要になるが、それでも民間医療に比べると廉価である。ただ、公的医療を受診する患者は多く、専門的医療を受けるまでに数か月、ときには1年以上すら待たされることがある。

民間医療は、private health service と呼ばれ、診療費、検査代などが実費で請求され、民間医療保険で賄われる。公的医療に比べて高額にはなるが、短時間で医師の診察を受けることができ、患者が自由に医療機関や専門医を選択できる。

II. アイルランドの教育制度

義務教育は、初等教育 (First Level/Primary Education) から中等教育 (Second Level/Secondary Education) の前期 (Junior Cycle) にわたる6～15/16歳までとなっている。その後、国内統一試験 (Junior Certificate) を受け、中等教育の後期 (Senior Cycle) が終了する17/18歳まで教育を受ける者が大多数である。

中等教育が終了する時点で、公立・私立にかかわらず国内統一試験 (Leaving Certificate) を受け、高等教育 (Third Level/Tertiary Education) への資格が取得できる。この試験の成績が、大学進学先や就職先の決定に大きな影響を及ぼす。

アイルランドでは、初等、中等教育を無料で受けることができる⁴⁾。もっとも、教育費の高い私立へ

の入学を希望する者も少なくない。

①就学前教育

4歳になると初等学校に付設されている幼児学級に入園できる。対象は、Junior Infants が4～5歳、Senior Infants が5～6歳である。

②義務教育

義務教育は6～15歳の9年間であるが、ほとんどの小児は6歳前から幼児学級に入っている。学校予算の大部分は、国からの補助金で賄われる。

中等教育は、中等学校、職業学校、コミュニティ・スクール、総合中等学校で実施されている。中等学校は私立で、大多数は修道会、残りは学校法人等が経営している。職業学校は職業教育委員会によって運営されている。

③高等教育

中等教育を修了した学生の約46%が高等教育機関に進学する。高等教育には、総合大学、科学技術カレッジ、教員養成カレッジがあり、ほとんどが国の予算で賄われている。総合大学には、ダブリン大学 (トリニティ・カレッジ)、アイルランド国立大学 (NUI)、リムリック大学、ダブリン・シティ大学の4校がある。科学技術カレッジは国内最大の高等教育機関として、2万人を超える学生が在籍している。私立のカレッジもあり、主にビジネス関連コースがある。

III. アイルランドの医学部

アイルランドには医学校が6校あり、うち1校のみが私立で、他は国立である (表1)⁵⁾。2018年の医学校卒業生は7,372名である。

①医学部入学者選抜

アイルランドの医学部は、従来、高校卒業生を入学対象としてきた。入学者選抜は高校卒業時に施行される統一試験 (Irish Leaving Certificate)⁶⁾ の成績が主な合格基準となっている。たとえばUCD医学部の高卒者入試では、統一試験としてアイルランド語、英語、その他の外国語、数学、実験科学 (化学など) の必須7～8科目が課されている。合格基準は7～8科目のうち成績が良好な6科目の合計が570点以上 (600点満点) と、高水準である。

2009年からは適正試験として Health Professions Admission Test (HPAT) を導入し、統一試験480点

表 1 アイルランド医学校

医学校名	所在都市	創設年	種別	学年制
NUI Galway School of Medicine	Galway	1849	公立	5年制
Royal College of Surgeons in Ireland School of Medicine	Dublin	1880	私立	5または6年制、4年制
Trinity College Dublin School of Medicine	Dublin	1711	公立	5年制
University College Cork School of Medicine	Cork	1841	公立	5年制
University College Dublin School of Medicine	Dublin	1854	公立	6年制、4年制
University of Limerick School of Medicine	Limerick	2007	公立	4年制

以上の高卒者から HPAT と統一試験の両者の結果から選択されるようになっている⁷⁾。すなわち、学業成績だけでなく、医師としての適性をも判断しようとする方針に転換された⁸⁾。

一方、2006 年からは学士入学制度も導入された⁹⁾。高卒者に対しては 5 年制または 6 年制のコースであるが、学士入学者には 4 年制のコースがあり、6 医学部中 3 校で実施されている（表 1）。学士入学制度は、医師不足の解消に加え、医師養成の多様化に備えて、多種多様な能力をもつ人材を育成する目的がある。

学士入学者の大半は、理学部や工学部など理科系出身者であるが、一部は人間科学部や教育学部など文科系出身者である。アイルランドの医学部での女子学生の比率は約 62% である¹⁰⁾ が、ダブリン大学医学部の 2008 年現在の学士入学では女子学生が約 23% と少ない。その他、身体障害者枠、北アイルランドの成績優秀者枠、EU 枠なども設定されている。

アイルランドおよび EU 出身者に対する学費は、僕が視察した 2008 年当時は無料であったが、現在では国立の UCD 医学部では 8,371 ユーロ、私立の RCSI では 10,157 ユーロの学費が課されている^{11), 12)}。EU 以外の海外学生の学費は、UCD では 46,350 ユー

ロ、RCSI では 55,135 ユーロとなっている。

②ダブリン大学医学部（UCD）

ダブリン大学は 37 のスクール（学科・専攻）からなる 6 つのカレッジ（学部・研究科）で構成される総合大学である。

医学部は 1854 年に創立され、市内中心部から 5km ほど南にある閑静な地区にベルフィールドキャンパスがある（写真 1）。医学部の歴史は古いものの、医学部の建物は比較的新しく、学生達は自転車やバイクで通学している（写真 2）。図書館を始め、随所にアイルランド語（ゲール語）と英語が併記され、アイルランド人としての誇りが感じられる（写真 3）。コンウェイ研究所、アイルランド感染



写真 2 ダブリン大学医学部校舎

写真 1 閑静なダブリン大学
ベルフィールドキャンパス写真 3 ダブリン大学医学部図書館
（アイルランド言語のゲール語と英語が併記されている）

症研究センター、合成および化学生物学センターなどに近接し、研究活動も盛んである。

医学部教育は6年制と4年制がある¹¹⁾。2019年には6年制コースの入学生は159人、卒業生は123人で、4年制コースは112人が入学し、100人が卒業している⁵⁾。両コースともに英語で教育され、アメリカ人学生など海外からの学生も受け入れている。冒頭でも紹介したペナン大学との提携プログラムがある。

教育カリキュラムは、6年制コースでは、1、2年次は主として準備教育と基礎医学教育が行われ、3、4年次は臨床医学教育、そして5、6年次は臨床実習が行われる(表2)。4年制コースでは、1、2年次に基礎医学教育と臨床医学教育が行われ、3、4年次は6年制コースと同じく臨床実習が実施される(表3)。

臨床実習は、St. Vincent's University Hospital、St. Columcille's Hospital、Royal Hospital Donnybrook Hospitalなどの大学関連病院や、一般クリニック等で行われる。

すぐれた臨床医を育てるため、早期体験実習、社

会活動、チュートリアル教育などが積極的に実践されている(写真4)。

③アイルランド王立外科大学(RCSI)

RCSIは1784年に外科医を養成する施設として発足した。1880年には、外科医養成だけでなく、医学、薬学、理学療法の教育プログラムを提供する医療系大学になっている。バーレーン、マレーシアとも提携し、国際的な医学教育を行っている¹²⁾。教育プログラムの75～99%が臨床医学教育で、臨床医を育成することに重点が置かれている⁵⁾。もっとも、研



写真4 ダブリン大学医学部でのチュートリアル教育

表2 6年制カリキュラム(ダブリン大学医学部)

	第1セメスター				第2セメスター				第3セメスター	
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
第1学年	物理化学、細胞生物学基礎、医学物理学、保健医療体制・情報、医動物学、患者・医師・保健医療				無機化学、有機化学、科学と社会、臨床遺伝学、医学物理学					
第2学年	組織学、発生学、筋骨格系、臨床医学・保健医療情報、分子生物学、細胞間情報伝達				血管系、循環系、腎排泄系、呼吸系、疫学、生物統計学、公衆衛生学					
第3学年	神経科学、運動系、消化器、肝臓、内分泌、病態生理学、薬理学				身体障害、感染症、遺伝学、周産期、小児科学、腫瘍学、免疫病理学、循環器疾患、腎疾患					
第4学年	血液疾患、免疫不全症、消化器疾患、肝・胆・膵疾患、呼吸器疾患、中枢神経疾患、内分泌疾患				治療学、診断学、EBM、臨床手技、耳鼻咽喉科学、眼科学					
第5学年	内科実習/外科実習			法医学	内科実習/外科実習		精神科実習/ 産婦人科実習		小児科実習/ 地域医療実習	
第6学年	2診療科選択実習（精神科、小児科、産婦人科、地域医療）			公衆衛生	内科選択実習	臨床実習総括（内科選択、サブインターンシップ、救命救急医療等）				

表3 4年制カリキュラム(ダブリン大学医学部)

	第1セメスター				第2セメスター				第3セメスター	
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
第1学年	人体構造、患者中心医療、微生物学、遺伝性疾患、腫瘍学、細胞間伝達、生化学、免疫学、薬理学				解剖学、循環呼吸系治療、感染症治療、循環呼吸器疾患、疫学、生物統計学、公衆衛生学				小児科実習/ 地域医療実習	
第2学年	消化器系、消化器系生理、消化器疾患、消化器系治療、内分泌系、内分泌疾患、腎臓生理、外傷、幹細胞、放射線学、画像診断学				身体障害、神経系、神経疾患、腫瘍学、免疫病理学、生殖系、精神系、小児、耳鼻咽喉科、眼科、プライマリケア、医療実践					
第5学年	内科実習/外科実習			法医学	内科実習/外科実習		精神科実習/ 産婦人科実習			
第6学年	2診療科選択実習（精神科、小児科、産婦人科、地域医療）			公衆衛生	内科選択実習	臨床実習総括（内科選択、サブインターンシップ、救命救急医療等）				

究活動にも力は注がれている。

キャンパスはダブリン中心部にある St. Stephen's Green 公園にあり、1784 年に王室の勅許を受けている。正面玄関はさも都市部にある医学部の体裁そのものだが（写真 5）、公園に面した側から見れば荘厳な建物が残っている（写真 6）。

医学部教育は 5 年制としてスタートしたが、2006 年からは学士入学制度である 4 年制コースを導入している。5 年制コースには、1 年間の Foundation Course（進学課程）を設けた 6 年制コースもある。2014 年には、5 年制コースには 271 人が入学し、207 人が卒業している。4 年制コースには 63 人が入学し、59 人が卒業している。いずれのコースも英語で教育されている。

高校卒業生を対象にした進学課程では、生理学、医化学、人生物学、診断学、治療学、薬理化学、解剖学、プロフェッショナルリズムなどが、講義、チュートリアル、実習などで教育される。多職種間連携教育（Inter-Professional Education: IPE）も医師養成に重要な教育と位置づけられて、生理学療法学生、薬学学生などと共に学んでいる。



写真 5 RCSI 玄関



写真 6 RCSI の荘厳な建物

専門課程の 1 年次には、臨床医学への入門として正常の構造と機能に関わる解剖学、生理学、薬理学など基礎医学、臨床技能、早期体験実習、IPE などが教育され、多選択肢問題試験（MCQ）や記述試験による評価と客観的臨床能力試験（Objective structured clinical examinations: OSCEs）で学修成果の到達が評価される。

2 年次には、微生物学、病理学、臨床医学が、講義、実習、シミュレーション教育などで実施される。教育病院での実習も行われる。

3 年次には、教育病院で臨床実習が実施される。選択実習もあり、6 週間の研究を行うこともある。そして、4、5 年次には国内の関連教育病院で診療科での臨床実習が行われる。とくに 5 年次には、準インターン教育として、医療チームに参加して実践的なトレーニングを受ける。内科と外科は 24 週間配属されるのも特徴的であろう。臨床実習の評価は、ポートフォリオ、ログブック、症例提示、MCQ や記述試験などで行われる。

学士入学の 4 年制コースは、より臨床医学教育に特化されている。1 年次は解剖学、生理学など基礎医学が講義、チュートリアル、実習などで教育され、2 年次には、教育病院で病理学、微生物学、臨床医学入門、診断学、治療学などの実践的な教育が行われる。3 年次には、関連教育病院で産婦人科、内科、外科、家庭医療、精神科、小児科などの臨床実習が診療チームに参加した形で行われる。4 年次には準インターン教育として内科や外科を中心に実践的な臨床実習が行われる。

なお、アイルランドでもっとも歴史があり、有名なトリニティ・カレッジだ。1592 年にエリザベス 1 世によって設立され、医学部創設は 1711 年と古い。是非とも視察したかったが、残念ながらアポをとる手立てがなく、キャンパスを見て回るしかなかった。国宝「ケルズの書」が展示されている図書館を始め、荘厳な美しさの建物には驚嘆した（写真 7～10）。

ヨーロッパの格調高い大学の建物を見るにつけ、わが国の大学が否が応でも安普請に思えてしまうのは、僕の錯覚、いや妬みだろうか？

UCD、RCSI とともに視察はむろん昼間。遠来の客をフルコースのランチでもてなしてくれた。豊かな経済状況を反映し、魚料理には白ワイン、肉料理に



写真7 トリニティ・カレッジ図書館



写真9 トリニティ・カレッジ構内



写真8 トリニティ・カレッジ構内

写真10 トリニティ・カレッジ構内
(歴史家 William Edward Hartpole Lecky 像)

は赤ワインと、自前の夕食をはるかに上回るご馳走だった。

ウェ이터がデザートメニューを運んできた際、「アイリッシュコーヒー」というのが目に入った。アイルランドで飲まないのは失礼だろうと思ってオーダーした途端、先方の医学部長達は顔を見合わせてニヤニヤ。変だなと思ったが、すぐに理由が判明した。なんと、そのコーヒーは、ウイスキー 1: コーヒー 1: ミルク 1 のブレンドだった!! となれば、キツイのが午後の会議。アクビを懸命にこらえ、英語を聞き取るのに冷汗びっしょり!!

Ⅳ. アイルランド紀行

話は横道にそれる。高知大学に出張したとき、元土佐藩主山内家の下屋敷が旅館になっているホテルに泊まった。大名の庭園と温泉がゆっくり楽しめる格式ある宿だ。

夕食後にゆったりと広い温泉につかっていると、

湯けむりの中におよそ東洋人らしからぬ御仁がいた。思わず声をかけたところ、なんと、アイルランド人だった。彼は愛媛県内で英語を教える傍ら、温泉を好んで巡っているとか。ちょうどアイルランドへの出張を計画していた矢先なので、アイルランドの魅力を尋ねた。すると、真っ先にあげたのがギネスとパブ。アイルランド人にとっては誇りらしい。

アイルランドには、ロンドンのヒースロー空港で乗り継いでダブリンへ。代表的なハブ空港であるヒースロー空港は広く、国際線と国内線ターミナル間はバスでの移動。そのバスの中に、見覚えのある女性と目が合った。大学時代の同級生だった。

聞けば、女子旅よろしく、悠々とイングランドの湖水地方をゆったり周遊するとか。それに比べ、僕はパソコンを抱えての仕事!! その上、アイルランドとスコットランドの視察を終え、帰国のためヒースロー空港でセキュリティチェックの長い列で並んでいたら、またもや彼女に遭遇。同じ航空機での成田ーロンドン往復だった。

僕の旅程中は生憎雨の連続だったが、彼女は晴天続きで湖水地方を満喫できたらしい。日頃の心がけの差がいきなり出たのかしら？

折角のアイランドだ。2度と来る機会はあるまいと、視察の合間を縫って市内見物。ダブリンは市内の中心部を流れるリフィ川を挟み、主な市の観光スポットを歩いて巡ることができる(写真11)。リフィ川の南岸には、1823年にカトリック協会を設立して、当時イギリスで主流のプロテスタントからカトリック教徒の解放に尽力したというダニエル・オコンネルの像が威風堂々と立ち、ランドマーク的な存在感を放っている(写真12)。これを拠点にすれば、迷うことなく、市内を散策できる。

まずは、ダブリン城(写真13、14)。1204年にジョン王が建造して以来、イギリスによるアイランド統治の拠点だった。そもそもダブリンという呼称は、ヴァイキングの言葉で「黒い水たまり」を意味する Dubh Linn に由来し、リフィ川のほとりにはヴァイキングの砦があったらしい。石で作られたガッチリした建物は、要塞としての迫力は満点だ。

城内には歴史あるベドフォード・タワーや、展示

室、土産物店もあり、ヴァイキングの末裔らしき風采の鍛冶職人に教わって槌を握ったり、中世の鎖鎧を試着した(写真15)。土産には、ケルトの紋様が刻み込まれた石版のフォト・ケースを買った。ケルトの紋様は、アイヌ文化にも相通じるように思える。荒涼とした大地と妖精がイメージのアイランドには、石の文化がよく似合う。

リフィ川を挟んだ北岸には、かつて税関の建物だったカスタム・ハウスがある(写真16)。緑色のドーム屋根には、「川の女神」像があり、川を静かに見守っている。この建物は1791年にイギリスの



写真13 ダブリン城



写真11 ダブリン市内のリフィ川



写真14 ダブリン城内のベドフォード・タワー



写真12 ダブリン市内のオコンネル像



写真15 ヴァイキング時代の医術(ダブリン城)

建築家ジェームス・ガンドンによって設計されたが、当初から国民は快く思っていなかったらしい。実際、1921年にはイギリスからの独立戦争の勝利を祝った群衆が、大英帝国支配のシンボルとも言えるカスタム・ハウスを焼き打ちにした。その後に修復され、現在では行政関連施設が入り、ダブリンでも代表的な建造物になっている。

さらに足を伸ばしてトコトコ歩いていたら、小泉八雲 (Lafcadio Hearn) が少年時代を過ごしたという家に出くわした (写真 17)。現在では Bed & Breakfast と呼ばれる、いわば日本のビジネスホテルのようなホテルになっている。日本人でなければ、見落としていたかも。

さて、「ダブリンの新宿」とも言うべき繁華街が、ラフィ川の南岸にあるテンプル・バーだ。石畳の通りには、かつて修道院があったそうだが、1540年に解散した修道院の跡地を Temple 一族が所有したことに因む。なお、Bar とは土砂が堆積した河口を意味する。この地域には、レストラン、カフェ、パブ、書店、雑貨店、劇場などがある。



写真 16 カスタム・ハウス



写真 17 小泉八雲 (Lafcadio Hearn) が少年時代に過ごした家 (現在はホテル)

ブラブラ歩いていると、その名も不眠症を意味する INSOMNIA というコーヒー店があった (写真 18)。とびっきりカフェイン濃度が高いコーヒーを出しているのだろう。その隣には、ギネスの看板が出たパブがあった。

ダブリンに来たのに、パブを外す訳にはいくまい。夜はパブでの夕食 (写真 19)。魚介が中心の郷土料理に、ビールとウィスキー (写真 20)。アイリッシュ・



写真 18 ダブリン市内 (コーヒー店名は INSOMNIA!、パブはギネスの表示)



写真 19 パブ店内



写真 20 パブでのアイルランド料理 (フィッシュ&チップス、ムール貝、アイリッシュシチュー、もちろんビール付き)

ウィスキーはスコッチ・ウィスキーとは違い、スモーキーフレーバーがない独特な味だ。パブでは“見知らぬ人といつでも仲良しになれる”と聞いていたが、アルコールに後押しされ、外国人（おっと、当地では僕こそが外国人）と英語でスラスラ(?) 話せ、友達になれた。残念ながら、お目当てのアイリッシュ・ダンスは見損なった。

RCSI 視察を終えた後は、夜の航空便で隣国スコットランドのグラスゴーへ移動することになっていた。小さな町ゆえに、空港への移動にさほど時間はかからない。時間を見計らって、ギネス・ビール工場を見学することにした（写真 21）。

ギネス・ビール工場では、創立からの歴史を辿っ



写真 21 ギネス・ビール工場
(右は鈴木利哉新潟大学教授)



写真 22 ギネス工場最上階でビールを楽しむ

てギネスが紹介され、ビール醸造のプロセスも展示されていた。ゆっくり見て回った後は、360 度展望が楽しめる最上階に行き、ダブリン市内を眺めながらギネス・ビールを一気飲み（写真 22）。有り体に言えば、黒ビールはあまり得意ではなかったが、出来たてホヤホヤの味は格別だった。“名物にうまいモノあり”とは、このことだろうか？

文 献

- 1) 外務省資料
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/ireland/data.html> 最終アクセス 2020.12.25
- 2) OECD 資料
<https://stats.oecd.org/> 最終アクセス 2020.12.25
- 3) 外務省資料
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/europe/ireland.html> 最終アクセス 2020.12.25
- 4) 外務省資料：アイルランドの学校情報
https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05europe/infoC50200.html 最終アクセス 2020.12.25
- 5) World Directory of Medical Schools.
<http://www.wdms.org/> 最終アクセス 2020.12.25
- 6) Leaving Certificate 2020.
https://www.citizensinformation.ie/en/education/state_examinations/established_leaving_certificate.html 最終アクセス 2020.12.25
- 7) Health Professions Admission Test.
<https://hpat-ireland.acer.org/> 最終アクセス 2020.12.25
- 8) Patrick Fottrell (Chairman). Medical Education in Ireland. A New Direction. Report of the Working Group on Undergraduate Medical Education and Training. 2006.
- 9) 鈴木利哉、錦織宏、奈良信雄：アイルランドにおける医学部学士入学制度。医学教育第39巻第6号、373-375、2008
- 10) Jane Buttimer (Chairperson). Preparing Ireland's Doctors to Meet the Health Needs of the 21st Century. Report of the Postgraduate Medical Education and Training Group. 2006.
- 11) UCD ホームページ
<https://www.ucd.ie/medicine/> 最終アクセス 2020.12.25
- 12) RCSI ホームページ
<https://www.rcsi.com/dublin/> 最終アクセス 2020.12.25